

小笠原流礼法のこころは  
日本の文化の中に  
脈々と受け継がれています



鶴の年玉包み

## お正月 と 小笠原流

「相手を大切に思う心」が基本の「小笠原流礼法」。お正月という節目にふさわしい心のこもった「かたち」をご紹介します。

子ども達のお正月の楽しみといえば、お年玉。手軽にお年玉袋を手に入れることもできますし、中身ほどは袋には関心を持たないことでも、実はお年玉袋は、元々は紙を折って包んでいたのです。このような包みのことを小笠原流礼法では「折形」と呼んでいます。

上の写真は「鶴の年玉包み(ねんぎょくつつみ)」と呼ばれ、鶴をあしらった折形です。元々は粉包みといって、祝い事につきもののお赤飯やお餅に添える、ごま塩や黄粉などを入れた包みとして使用されたものようです。

このようにていねいに折られた包みで渡すお年玉は子ども達の喜びが増すかもしれませんね。

冠婚葬祭で一般的に使われているご祝儀袋やお祝い包みなども同じです。元々は紙を折って作っていたもので、小笠原流礼法のひとつなのです。

現在も、現金やものを送る場合に「贈る」というよりも「包む」と言いますよね。伝統が受け継がれている証拠と言えるかもしれません。

南アルプス市とゆかりの深い小笠原流礼法。南アルプス市の伝統の深さを誇りに思いつつ、日本のお正月を過ごしてみたいかがでしょうか。



正月の床飾り

### 折った人の心、折りあげた手のぬくもり

それぞれ贈るものの形にあわせて、包む紙を折り上げたのが「折形」です。

白い紙は清浄をあらわし、白い紙で包むことで送り主の心も清らかであり、また、中身をけがれから守る役目もあるといわれています。

贈る「もの」も、贈る「相手」も大切に思う心がこめられているのですね。

### 箸は人と神を結ぶ架け橋

箸は単なる道具ではなく、神と人とを結ぶ「架け橋」と考えられていたようです。つまり、神の力を人間の身体に送り込む重要な道具だったと考えられていたのです。

柳箸のように両端が細い箸は、一端は私たち人間が、もう一端は神様が使用するものと考えられていたため、神様と喜びを分かち合っているともいえるのです。

歳神様をお迎えするわけですから、その箸を包む「箸包み」や箸を置く「箸置き」にも心を含めるといつもと違うお正月が過ごせそうです。



箸包み



鶴の箸置き

### 神様へのお供え物

昔から暦の節目を大切にしてきた日本人は、五穀豊穡や無病息災などの願いを込め、慎んで神を祀りました。そのとき神にささげる供御(くご・食事)のことを「節供(せちく)」といい、これが「おせち料理」と呼ばれるようになったといわれています。床の間に飾るものを床飾りと呼びますが、小笠原流礼法では「飾り」よりも「お供え」であることを大切に考えています。

小笠原流礼法の床飾りは、一年を通して「重要文化財 安藤家住宅」のお茶室にてご覧いただくことができます。(新年は1月8日から)

折形協力/深澤菱律師範一門 文・資料/文化財課 Tel.(282) 7269

ふるさと文化伝承館

次回エントランス展示  
平成27年1月16日(金)～

流転する村

～南アルプス市を襲った災害と村落移転～